

## 「入れ替わりの読み」と「変貌の読み」について\*

熊本 千明

### On 'the Replacement Reading' and 'the Transformation Reading'

Chiaki KUMAMOTO

#### 要 旨

「…が変わる」、「...changes」のような形式をもつ、いわゆる変化文には様々な意味があり、曖昧であることが知られている。例えば、*The president changes every four years* (Fauconnier 1985:40) という文は、大統領の地位を占める人が4年ごとに入れ替わるという解釈と、ある特定の大統領が4年ごとにその属性を変えるという解釈が可能である。前者は、主語名詞句を「変項名詞句」(西山 2003)ととった場合に出てくる読みであり、後者は、主語名詞句を「指示的名詞句」ととった場合に出てくる読みである。それぞれ、属性変化を表す「変貌の読み」、値変化を表す「入れ替わりの読み」と呼ばれる(西山 1995、2003)。

もともと指定コピュラ文の意味構造を解明するために用いられた「変項名詞句」の概念は、コピュラ文だけでなく、存在文や、変化文の意味の分析にも重要な役割を果たすものである。本稿は、この概念を援用して、これまで十分な説明がなされてこなかった *The first person to walk on the moon might not have been right-handed* (Akmajian et al. 1995:246) のような、法助動詞を伴う文の「反事実仮定の読み」<sup>1</sup>における曖昧性を解明しようとする試みである。Akmajian et al.(1995)は、この文のもつ二つの解釈、すなわち、ニール・アームストロングが右利きではなかった可能性があるという解釈と、ニール・アームストロングが左利きの人と交代していたかもしれないという解釈を、Donnellan(1966)のいう、定記述表現の「指示的用法」(referential use)と「帰属的用法」(attributive use)の違いによるものと考えた。しかし、どちらの用法の名詞句も「指示的名詞句」であることを理解すれば(Kumamoto 1993、Nishiyama 1997、熊本 2013)、この説明は不十分であることがわかる。これまで、助動詞/様相演算子(modal operator)を含むコピュラ文の曖昧さは、「事象様相」(de re)・「言表様相」(de dicto)、「広い作用域」(wide scope)・「狭い作用域」(narrow scope) (Kripke(1977 (1997))、「特定記述」(particularized description)・「役割タイプ記述」(role-type description) (Rothschild 2007)などの用語を用いて説明されてきたが、さまざまな概念が十分に既定されないまま用いられ、分かりにくい議論となっている。

ここでは、名詞句の指示性・非指示性に注目して行われてきたコピュラ文、変化文の意味

構造の分析(西山 1995、2003)をもとに、法助動詞を伴うコピュラ文における曖昧性を、主語名詞句の文中における意味機能の観点から考察する。このタイプの文の「入れ替わりの読み」は、西山(1995)の「値比較の変化文」に準じた分析を行うことが可能であり、主語名詞句を非指示的な変項名詞句であると考えることによって、その特性が説明できるのではないかと思われる。

【キーワード】 変化文、コピュラ文、(倒置)指定文、措定文、指示的名詞句、変項名詞句、指示的用法・帰属的用法、事象様相・言表様相、広い作用域・狭い作用域、特定記述・役割タイプ記述

## I. 序

議論に入る前に、Higgins(1979)、上林(1988)、熊本(1995)、西山(2003)の分類にもとづき、主要なタイプのコピュラ文の意味構造を見ておくことにしよう。下線部の名詞句は、文中において、その下に記された意味機能をもつ。日本語の文についても、同様に考えることができる。

- (1) 措定文 'A is B' : A の指示対象について、B の表示する属性を帰す。

John is a student.  
指示的名詞句      叙述名詞句  
ジョンは学生だ。

- (2) (倒置)指定文 'A is B'、'B is A' : A の変項を埋める値を B で指定する。

a. Smith's murderer is Jones.  
変項名詞句 ([x is Smith's murderer])      値名詞句<sup>2</sup>  
スミスの殺害者はジョーンズだ。

b. Jones is Smith's murderer.  
値名詞句      変項名詞句 ([x is Smith's murderer])  
ジョーンズがスミスの殺害者だ。

- (3) (倒置)同定文 'A is B'、'B is A' : A の指示対象を他から識別する条件(同定条件)を提供する。

(Who is John?) - John is a teacher who's been helping me with  
指示的名詞句      polynomials.      (Higgins 1979:244)  
指示的名詞句(同定条件を指示する名詞句)  
(ジョンて誰?) - ジョンは、私に多項式の手助けをしてくれている先生だ。

(4) (倒置)同一性文 'A is B'、'B is A' : A の指示対象は B の指示対象と同一であると認定する。

a. The Evening Star is the Morning Star.

指示的名詞句                      指示的名詞句

宵の明星は明けの明星だ。

b. The Morning Star is the Evening Star.

指示的名詞句                      指示的名詞句

明けの明星が宵の明星だ。

注意しておきたいのは、倒置指定文の主語位置に現れる変項名詞句は、命題関数 [...x...] を表示する一項述語であり、非指示的名詞句であるという点である。よく混同されるが<sup>3</sup>、変項名詞句は、Donnellan(1966)のいう帰属的用法の定記述表現とは性質を異にするものである。(5)は、措定文であり、上の規定によって、その主語名詞句は指示的名詞句である。

(5) Smith's murderer is insane. (Donnellan 1966:285)

(6) a. 帰属的用法:(スミスのひどい殺され方を見て)誰であれ、こんなことをする人は精神異常者だ。

b. 指示的用法:(スミス殺しの犯人、ジョーンズの法廷における奇妙な振る舞いを見て)スミスの殺害者(ジョーンズ/あの男)は精神異常者だ。

(6)の指示的用法、帰属的用法、いずれの用法においても、主語名詞句は、世界の中の個体を指示する「指示的名詞句」に変わらないことを押さえておきたい。後に変化文、法助動詞を伴うコピュラ文の意味構造を考察する際に、指示性・非指示性という概念を把握しておくことが重要となる。

## II. 変化文の曖昧性

Kumamoto(1996)においては、(7)の入れ替わりの読み、(8b)を、倒置指定文(9)と関連づける説明を試みた。

(7) The first person to walk on our moon might not have been right-handed.

(Akmajian et al. 1995:246)

(8) a. ニール・アームストロングは(もし、矯正されなければ)、右利きではなかったかもしれない。(変貌の読み)

b. ニール・アームストロングは病気になって、左利きの人と交代していたかもしれない。(入れ替わりの読み)

(9) The first person to walk on our moon might not have been a right-hander.

(Kumamoto 1996:109)

(9)は、[x is the first person to walk on our moon]の変項 x を埋める値が 'a right-hander'

ではなく、他の値と入れ替わっていたかもしれない、という反事実の仮想を述べており、(7)の入れ替わりの読みと似通った意味を表すように思われる。コンピュータ文が属性の変化ではなく、値の入れ替わりを表すのであれば、主語名詞句は指示的な名詞句ではなく、変項名詞句であると考えなければならない。しかしながら、(7)の述語の位置に現れているのは形容詞であり、この *right-handed* を、変項の値を示すものと見なすわけにはいかない。倒置指定文(9)は語順を換えて(10)の形にしても同じ意味を表すが、(11)が示すように、(7)の語順を入れ替えることはできないのである。

(10) A right-hander might not have been the first person to walk on our moon.

(11) \*Right-handed might not have been the first person to walk on our moon.

変項名詞句が関与すると考えられるものの、措定文のような形式をもち、それ自体が倒置指定文であるとは言えない、(7)のタイプの文の意味構造をどのように捉えたら良いのか、その解決は不十分なままに残されていた。

ここでは、法助動詞を伴うコンピュータ文の曖昧性を考える手掛かりとして、西山(1995)による日本語の変化文の分析を概観することにして、西山(1995)は、変化文を、まず、以下のように、5つに分類する。(西山 1995:138-149)

(12) [A]属性変化：対象について、その属性の変化を述べる。

例：このところの急激な気温の変化で、その部屋のピアノがすっかり変わってしまった。  
指示的な名詞句

(13) [B]値変化の第1型：変項名詞句について、その変項を埋める値の入れ替わりを述べる。「Aが(B<sub>1</sub>からB<sub>2</sub>に)変わった」

例：洋子の家を訪ねるたびに、その部屋のピアノが変わるのに驚くよ。  
変項名詞句

(14) [C]値変化の第2型：隠れた変項名詞句が介在し、その変項を埋める特定の値について、他の値との取り替わりを述べる。「B<sub>1</sub>が(B<sub>2</sub>に)変わった」

例：先日、久しぶりに洋子の家を訪ねたが、その部屋のピアノが(オルガンに)変わった点以外は、インテリアの上でとくに大きな変化はなかった。(隠れた変項名詞句：[xがこの部屋の楽器である／家具である／...])  
値名詞句                      値名詞句

(15) [D]同定変化の第1型：ある対象について、その同定条件の変化を述べる。「Aが(B<sub>1</sub>からB<sub>2</sub>)に変わった」

例：魔法使いは、なにか呪文をとこなえたかと思うと、その部屋のピアノを変えて立派な白馬にした。  
指示的な名詞  
同定条件を指示する名詞句

(16) [E]同定変化の第2型：ある特定の同定条件に着目し、それについての変化を述べる。「B<sub>1</sub>が(B<sub>2</sub>に)変わった」

例： 毛虫 は 蝶 に変わる。

同定条件を指示する名詞句 同定条件を指示する名詞句

[A]の属性変化は、措定コピュラ文、[B]、[C]の値変化は、倒置指定コピュラ文、[D]、[E]の同定変化は、同定コピュラ文と、それぞれ内的な意味関係をもつことが見てとれる。

西山(1995)では、こうした例以外に、あるレベルで値変化が、また別なレベルで属性変化が関与するような、複雑なケースもあることが論じられている。(17)の例を見よう。

(17) JALの機内食もこの10年間で、ずいぶん変わったものだ。 (西山 1995:152)

(17)の下線部は、同一対象について、その属性の変化を述べるものではない。しかし、また、単に値が入れ替わったことを示しているのでもない。(17)が意味するのは、変項名詞句 [xがJALの機内食である]の変項xに入る値の属性が、10年間で変化したということである、と西山(1995)はいう。このように、複数の値に注目して比較し、それらの相違面に特に注目するタイプの変化文を、西山(1995)は、「値比較の変化文」と呼ぶ。

(17)のような例では、異なる値のもつ属性が明示されていないが、属性が明示される場合もある。

(18) 慶應義塾大学の文学部長はこの10年間でずいぶん若くなった。 (西山 1995:153)

(18)も同様、下線部の名詞句でもって特定の慶應義塾大学の文学部長を指し、その人がこの10年間で属性を変化させ、若くなったということを言おうとしているのではない。(18)が述べているのは、10年間で [xが慶應義塾大学の文学部長である] という変項を埋める値 a、b、c、d を比較すると、a、b、c、d の順で年齢が若い、ということであると、西山(1995)は説明する。(19)も同種の例である。

(19) 戦後50年間で、日本のこどもたちもずいぶん大きくなった。 (西山 1995:153)

西山(1995)は、(18)、(19)のタイプの変化文も、値比較の変化文の変種とみなすことができるとしている。これらも値変化と属性変化が組み合わさったケースであり、それぞれの値の属性を比較して、「より若い」「より大きい」と、その関係を述べるものとなっている。

本稿で考察する法助動詞を伴うコピュラ文の入れ替わりの読みを、この値比較の変化文の類例とみなして分析するのは、有意義なことであると思われる。この場合は、値の入れ替わりが現実世界と可能世界の間で起こり、その入れ替わった値の属性について述べていることになる。(8b)は、二つの世界の間で、月に行く人がニール・アームストロングから他の人に代るという値の入れ替わりがあり、その入れ替わった人について、右利きではないというコメントをしているという解釈である。他方、(8a)は、(12)の属性変化に対応するものであり<sup>4</sup>、特定の個人、ニール・アームストロングの属性が異なっていたという、反事実を仮想しているという解釈である。(7)の入れ替わりの読みを値比較の変化文に準じて考えることによって、直接、倒置指定文と結びつける分析のもつ問題は回避できることになる。

Akmajian et al.(1995)は、この二つの読みを、それぞれ Donnellan(1966)の指示的用法と帰属的用法に対応させて、解説する。特定の人を念頭に置くか否かの相違であると、考える

のである。しかし、名詞句の指示性に注目し、指示的名詞句と変項名詞句の対立を考慮することなしに(7)の曖昧性を説明するのは、困難であると思われる。入れ替わりの読みにおいて、主語名詞句を帰属的用法の名詞句とみなすことにどのような問題があるのか、その議論は後に行うこととして、コピュラ文の曖昧性を考える際には文中における名詞句の意味機能の把握が重要であることを示す、Higgins(1979)の挙げた例を見ていくことにしよう。

### Ⅲ. 名詞句の意味機能とコピュラ文の曖昧性

Higgins(1979)は、(20)の文について、*loser*に強勢をおいた場合、少なくとも(21)のような8通りの解釈ができるとしている。

- (20) The winner of the election might have been the LOser.
- |                               |                           |         |
|-------------------------------|---------------------------|---------|
| (21) a. referential NP(指示的用法) | referential NP(指示的用法)     | (同一性文)  |
| b. referential NP(指示的用法)      | referential NP(帰属的用法)     | (同一性文)  |
| c. referential NP(帰属的用法)      | referential NP(指示的用法)     | (同一性文)  |
| d. referential NP(帰属的用法)      | referential NP(帰属的用法)     | (同一性文)  |
| e. superscriptional NP        | specificational NP(帰属的用法) | (倒置指定文) |
| f. superscriptional NP        | specificational NP(指示的用法) | (倒置指定文) |
| g. referential NP(帰属用法)       | predicational NP          | (措定文)   |
| h. referential NP(指示的用法)      | predicational NP          | (措定文)   |
- (Higgins 1979:271 - 273)

Higgins(1979)は、倒置指定文の主語名詞句をリストの見出し(the heading of a list)、述語名詞句をそのリストとみなし、前者は変項、後者はその値という関係になっていると考える。例えば、(22a)は、(22b)のような意味を表しているという。

- (22) a. What I bought was a punnet of strawberries and a pint of clotted cream.  
 b. I bought the following things: a punnet of strawberries and a pint of clotted cream.
- (Higgins 1979:154)

Higgins(1979)は、変項名詞句の概念を用いることはないが、倒置指定文の主語名詞句は非指示的名詞句であること、それは、Donnellan(1966)の「帰属的用法」の定記述表現とは異なるものであること、後者は指示的名詞句であることを、正しく指摘している。概略、superscriptional NPは変項を表す名詞句、specificational NPは値を表す名詞句と考えてよいであろう。

ここで問題となっている選挙を1972年のアメリカ大統領選挙であるとする、指示的用法においては、*the winner of the election*はニクソンを、*the loser*はマクガバンを指す。(21)のそれぞれの解釈は、次のようなものであろう。

- (23) a. ニクソンは、マクガバン(と同一人物)であったかもしれない。<sup>5</sup>

- b. ニクソンは、誰であれ選挙に負けた人(と同一人物)であったかもしれない。
- c. 誰であれ選挙に勝った人は、マクガバン(と同一人物)であったかもしれない。
- d. 誰であれ選挙に勝った人は、誰であれ選挙に負けた人(と同一人物)であったかもしれない。
- e. 次の人が選挙に勝っていたかもしれない:誰であれ選挙に負けた人。
- f. 次の人が選挙に勝っていたかもしれない:マクガバン。
- g. 誰であれ選挙に勝った人は、選挙に負けていたかもしれない。
- h. ニクソンは、選挙に負けていたかもしれない。

Higgins(1979)は、superscriptional NP と帰属的用法の名詞句を同一視すると、これらの可能な区別を示すことができなくなると指摘する。これに対し、Declerck(1988)は、倒置指定文の主語名詞句は、指示対象が話し手に知られておらず、その記述の内容が重要であるという点で、帰属的用法の名詞句とみなすことができると反論する。Declerck(1988)は、superscriptional NP は、弱い意味で指示的な名詞句である(‘referring’ NP only in a weak sense of the term) (Declerck 1988:47)と述べ、superscriptional NP と「帰属的用法」の名詞句を同一視するわけではなく、帰属的用法の名詞句の一つの使い方が、superscriptional NP としての使い方なのだと主張するが、これは、これら二つの名詞句の指示性における相違を認識しないところから来る、誤解にもとづく主張である。主語名詞句の指示性・非指示性が、変化文の解釈に大きな相違をもたらすことを、前節で見た。次節では、名詞句の指示性・非指示性を考慮しない分析にはどのような問題が生じるのか、これまでになされた考察を見直してみることにしたい。

#### IV. 指示的用法・帰属的用法 / 事象様相・言表様相 / 広い作用域・狭い作用域 / 特定記述・役割タイプ記述

法助動詞を伴うコピュラ文の曖昧性に関するこれまでの考察においては、主語名詞句が指示的であるか、非指示的であるかという重要な違いを見過ごし、「特定」の対象を指示するか否かという違いを問題にする議論が、しばしば見受けられる。特定の対象を指示する場合を、「指示的用法」、「事象様相」、「広い作用域」、「特定記述」の概念によって、特定の対象を指示しない場合を、「帰属的用法」、「言表様相」、「狭い作用域」、「役割タイプ記述」の概念によって、説明しようとするのである。特定の対象を指示するのではない名詞句でも、世界の中の対象を指示するという意味で、指示的なものがあることが理解されていない。文中における名詞句の意味機能、すなわち、当該の名詞句が指示的であるか否かという点に、注意が払われていないのである。

まず、帰属的用法の概念によって入れ替わりの読みを説明する際の問題点を見ておこう。(24)の入れ替わりの読みは、主語名詞句を帰属的用法の定記述表現であると考えたのでは説

明ができない。

(24 = (7)) The first person to walk on our moon might not have been right-handed.  
下線部の名詞句を帰属的用法と読むというのは、例えば、次のような解釈をするということである。

(25) 宇宙飛行士の訓練を続けると、様々な装置が左手で操作し易くできているため、左利きになりやすいという。そこで、左利きにならないよう努力をするが、最初に月に行った人は、誰であれ、努力が足りなければ、左利きであったかもしれない。

(Kumamoto 1996:109)

このように、下線部を帰属的用法の定記述表現とみなしたとしても、指示的用法の場合と同様、出てくるのは属性変化の読みであり、入れ替わりの読みではない。主語名詞句が指示的名詞句であるならば、(24)を値の入れ替わりを述べた文と解釈することはできないのである。

もう一つの問題は、入れ替わりの読みにおいて、入れ替わった値は、必ずしも非特定の対象に限られないということである。確かに、(24)の入れ替わりの読みにおいては、ニール・アームストロングに代わる宇宙飛行士として、特定の人物が想定されていないかもしれない。入れ替わった値を表す名詞句が帰属的用法の名詞句であることは、考えられることである。しかし、(26)のような例を見てみよう。メアリとケイトが秘書に応募し、ジョンはメア리를採用したが、メアリは、仕事ができない。もし、メアリではなく、ケイトが秘書になっていたら、秘書はもっと有能であったらと、話し手がコメントしているような状況である。

(26) John's secretary might have been more efficient.

この入れ替わりの読みにおいて、可能世界において入れ替わった値、ケイトは特定の人物であるから、主語名詞句を、特定の人物を念頭に置かない、帰属的用法の名詞句であるということではできない。メアリ自身の属性が異なっていた可能性を述べる変貌の読みと、メアリとケイトが入れ替わっていた可能性を述べる入れ替わりの読みは、特定の指示対象を念頭に置くか否かの違いとして説明することはできないのである。

和泉(2016)は、(27)の二つの読みを(28)のように解説する。

(27) The president of the United State could be female.<sup>6</sup> (和泉 2016:145)

(28) a. 少なくとも一つの可能状況(世界)*s*が存在し、文脈上関連する状況における唯一のアメリカの大統領(すなわちバラク・オバマ)が*s*において女性である。

b. 少なくとも一つの可能状況(世界)*s*が存在し、*s*における唯一のアメリカの大統領(それが誰であれ)が*s*において女性である。 (和泉 2016:145)

ここまで見てきた例は過去の反事実仮想であったが、(27)のような例も、現実世界と可能世界の間の相違を述べるものと考えて良いであろう。和泉が、入れ替わりの読みに関して、「誰であれ」という表現を用いている点に注意しよう。和泉(2016)は、(28b)の読みを、帰属的用法であると明示してはいないが、文脈上関連する状況から指示対象が定まるかどうか、という点が二つの読みの違いをもたらしているとする考察は、十分なものとは言えないであ

ろう。

次に、事象様相・言表様相の概念を用いた説明を見てゆこう。この用語は様々な使われ方をするが、大ざっぱに、前者は名詞句の指示対象が問題となる場合、後者はその記述自体が問題となる場合であると考えておくことにしよう。Kripke(1977(1997))には、それぞれの解釈を示す例として、(29)、(30)が挙げられている。

(29) The number of planets is necessarily odd.

(30) John believes that the richest debutante in Dubuque will marry him.

(Kripke 1977(1991):387)

(29)の事象的解釈は、実際の惑星の数<sup>7</sup>、すなわち「9」について、それが必然的に奇数であるという性質をもつ、という意味であり、これは真である。他方、言表的解釈は、「惑星の数は奇数である」という命題が必然的に真であるという意味であり、新たな発見があったり、惑星の認定基準が変わったりすれば、惑星の数は変わりうるので、これは偽である。(30)の事象的解釈は、(実際に)ダビュークにおける最も金持ちのdebutantであるような特定の女性について、ジョンが彼女が自分と結婚するだろうと信じている、という意味である。言表的解釈の方は、ジョンの信念の中でこの記述に合致するような誰かが、ジョンと結婚するであろうと信じているという意味である。この二つの例を見て分かるのは、事象様相、言表様相は、名詞句の指示性の違いを把握できる概念ではないということである。言表的解釈において、(29)の下線部は、変項名詞句であり、(30)の下線部は世界の中の個体を表す指示的名詞句であると考えられる。事象的解釈と異なり、言表的解釈においては特定の指示対象を念頭に置かないとしても、当該の名詞句は、指示機能をもつ場合も、もたない場合もあるのである。

さて、Kripke(1977(1997))は、(31)のような例は、事象様相・言表様相のような二分法に基づく概念によっては説明ができないと考える。(31)は、(32)に示すような三通りの分析が可能である。(32a)-(32c)の中、真であるのは、(32c)の解釈であり、これは、事象的解釈ではなく、言表的解釈でもない。言い換えれば、(32c)の解釈における定記述表現は、可能な最大の作用域ではなく、また、可能な最小の作用域でもなく、中間の作用域をもつものである。

(31) The number of planets might have been necessarily even.

(32) a.  $\diamond \square (\exists x)$  (There are exactly x planets and x is even) 言表様相

b.  $(\exists x)$  (There are exactly x planets and  $\diamond \square (x \text{ is even})$ ) 事象様相

c.  $\diamond (\exists x)$  (There are exactly x planets and  $\square (x \text{ is even})$ ) (Kripke 1977(1991):388)

(32a)-(32c)の表す意味は、(33a)-(33c)のように示すことができるという。

(33) a. It might have been necessary that there was an even number of planets. 偽

b. The actual number of planets (nine) might have been necessarily even. 偽

c. There might have been exactly eight planets, in which case the number of planets

would have been even, and hence necessarily even. 真

(Kripke 1977(1991):387-388)

実際、様相演算子は繰り返すことができるので、定記述表現にはいくつもの可能な作用域があることになり、その様々な解釈を扱うのに、事象様相・言表様相の区別は不十分であるというのである。

確かに、(31)の曖昧性は、指示性・非指示性の違いを考慮しない事象様相・言表様相の概念によって説明することはできないが、作用域の概念を用いた説明も十分とは言えず、入れ替わりの読みを可能にする定名詞句の意味機能を明らかにしていない。(33)のそれぞれの解釈は、(31)の主語名詞句を指示的名詞句とするか、変項名詞句とするか、という観点から、次のように言い換えることができるであろう。

- (34) a. 変項 [x is the number of planets] を埋める値が偶数であることが必然的であった可能性を述べる。  
b. 特定の指示対象すなわち、「9」について、その属性が必然的に偶数であった可能性を述べる。  
c. 変項 [x is the number of planets] を埋める値が「8」であった可能性があり、その「8」は必然的に偶数であったと述べる。

このように、(33a)、(33c)は値比較の変化文に対応する解釈、(33b)は措定文の解釈であることを認識することが、(31)の曖昧性を理解するために重要であると思われる。(34a)は、入る値が必然的にもつ可能性のある属性について、(34c)は、入る可能性のある、ある値が必然的にもつ属性について、仮想していると考えることができるであろう。

今度は、作用域による説明の不備を補うために、特定記述と役割タイプ記述の区別を提案する、Rothschild(2007)の議論を見ることにしよう。(35)の曖昧性は、定記述表現がとる作用域の違いによって把握でき、(36)の式で示すことができるという。

(35) The president might have been wise.

- (36) a. [<sub>1</sub>x : President x] (◇ wise x) 広い作用域:現実の大統領  
b. ◇[<sub>1</sub>x : President x] (wise x) 狭い作用域:可能な状況の中でその記述を満たす人 (Rothschild 2007:83)

しかし、定記述表現と法助動詞がもたらす作用域の曖昧さは、常に生じるわけではない。例えば、(37)の下線部は記述を満たす特定の人を指し、狭い作用域の読みはもたない。

(37) The man in the car is usually nice. (Rothschild 2007:81)

他方、(38)の下線部は、広い作用域、狭い作用域、両方の読みが可能である。

(38) The best student is usually reclusive. (Rothschild 2007:81)

Rothschild(2007)によれば、定記述表現の狭い作用域読みが可能になるのは、役割タイプ記述として機能している場合であり、特定記述である場合は、広い作用域読みだけが可能であるという。役割記述と特定記述は、次のように規定される。(Rothschild 2007:75-76)

- (39) 役割タイプ記述:関与する形而上可能な一連の状況において、記述の内容を満たす人がただ一人(あるいは、主要な人が一人)いて、その記述を満たす人が状況に応じて変化するということが、会話の参加者の間に共通の認識としてある場合、ある記述は、役割タイプ記述である。(例:‘the family lawyer’, ‘the mayor’, ‘the president’ など)
- (40) 特定記述:役割タイプ記述以外のものが特定記述である。多くの個体に共通な、一般的な性質を内容としてもつ表現は特定記述であり、会話の参加者の間に上述のような共通認識はない。(例:‘the dog’, ‘the tall boy’ など)
- (37)も、関与する一連の状況において、車の中にただ一人男性がいることが想定されれば、定記述表現は役割タイプ記述として機能し、狭い作用域の読みをもつことになるという。

Rothschild(2007)が役割タイプ記述の概念を用いて、記述に合う人の入れ替わりという状況を説明しようとしているのは、興味深い。(41)の下線部は、通常、特定記述であるが、私がパーティではいつも議論を始めて、一晩中一人の人と話し続けるということが共通の認識としてあれば、役割タイプ記述のはたらきをもつという。そして、私が実際には誰とも長話をしなかった場合でも、(41)は、もし、旧友のハンスがパーティに来ていたら、その役割を担っていただろうという命題を表すことになるという。

(41) Hans might have been the person I talked to the whole time. (Rothschild 2007:79)  
Rothschild(2007)は明記していないが、(41)は、指定文と解釈することが可能である。その場合、Rothschild が役割タイプ記述と呼ぶ下線部の名詞句は、非指示的な変項名詞句である。しかし、また、一方で、Rothschild は、(42)の下線部も、役割タイプ記述であるとしている。

(42) The president of the U.S. likes madeira. (Rothschild 2007:95)  
下線部は、役割タイプ記述の機能をもちながらも、特定の現在の大統領に関する命題を表すのに用いられるという。(42)の下線部は明らかに、指示的名詞句である。このように見ると、Rothschild(2007)の役割タイプ記述・特定記述の区別は、狭い作用域を取る定記述表現の意味的特徴を明らかにするとしても、名詞句の指示性・非指示性の違いを捉えるものではないことがわかる。

## V. 名詞句の指示性・非指示性と代名詞の選択

人を表示する名詞句を照応する際、その名詞句が指示的であるか否かによって、用いられる代名詞が異なる。次の例を見よう。

- (43) a. The tallest girl in the class, { that / it }’s Molly. (倒置指定文)  
b. The tallest girl in the class, { she /\*it / \*that }’s Swedish. (指定文)  
(Mikkelsen 2005:65)

(43a)の下線部は、非指示的な変項名詞句、(43b)の下線部は、指示的名詞句である。指示

的名詞句の照応には、*s/he* が、非指示的名詞句の照応には、*it/that* が用いられる。熊本(2003)では、以下のように、*whoever* 節が変項名詞句を含む文に付加された場合には、*it* が、帰属用法の定名詞句を含む文に付加された場合には、*it* と *s/he* の両方が、指示的用法の定名詞句を含む文に付加された場合は *s/he* が、節中に現れることを示した。

(44) They don't know [the answer to the question] Who is the murderer. But whoever it / \*he is, it (=the murderer) is a certain mad man. (変項名詞句)

(45) The Ferrari driver, whoever he / it is, has an unfair advantage. (帰属的用法)

(46) This guy Heidegger, whoever he / \*it is, has won yet another race. (指示的用法)  
(熊本 2003:356)

*whoever* 節は、*it* が用いられる場合には、指定の情報に関与しないことを、*s/he* が用いられる場合には、同定の情報に関与しないことを表わす。

第II節において、法助動詞を伴うコピュラ文の入れ替わりの読みにおける主語名詞句は、変項名詞句であると考えられるという議論を行った。そうではあるが、このタイプの文は、値比較の変化文に対応するものであり、変項自体ではなく、値として入ったものについて、その属性を述べるのであるから、直接、主語名詞句を *it* で受けることはできない。また、*he* を用いると、変貌の読みが優位となる。

- (47) a. The first person to walk on our moon might not have been right-handed.  
b. \*It (=the first person to walk on our moon) might not have been right-handed.  
c. He (=the first person to walk on our moon) might not have been right-handed.

このように、主語の位置においては、代名詞の選択を問うことはできない。そこで、熊本(2003)で行ったように、*whoever* 節を付加して、節中に現れる代名詞を比較し、入れ替わりの読みと変貌の読みにおける主語名詞句の指示性の違いを確認することにしたい。

(48) a. The first person to walk on our moon, whoever it / ??s/he was, might not have been right-handed. (入れ替わりの読み)

b. The first person to walk on our moon, whoever ??it / s/he was, might not have been right-handed. (変貌の読み)

(49) a. Whoever it was (who played the character) / ??s/he was, the heavy might have been more attractive. (入れ替わりの読み)

b. Whoever ??it was (who played the character) / s/he was, the heavy might have been more attractive. (変貌の読み)

法助動詞ではなく、副詞を伴う例も見ておくことにしよう。

(50) a. The director of the factory, whoever it / ??s/he is, is always rich. (入れ替わりの読み)

b. The director of the factory, whoever ?? it / s/he is, is always rich. (変貌の読み)

(48)-(50)の例から、入れ替わりの読みにおいては *it* が、変貌の読みにおいては、*s/he* が好まれることがわかる。興味深いのは(51)の例である。西川(2008)は(52)の例を挙げ、*himself*/

*his family* の先行詞は指示的名詞句でなければならず、したがって、入れ替わりの読みをした場合の主語名詞句を変項名詞句とみなすことはできないと主張する。<sup>8</sup>

- (51) a. The president of the U.S., whoever it / ??s/he is, is less and less proud of himself/  
his family. (入れ替わりの読み)  
b. The president of the U.S., whoever ??it / s/he is, is less and less proud of himself/  
his family. (変貌の読み)
- (52) The first person to walk on our moon might not have been proud of himself / his  
family.

しかし、(51)の入れ替わりの読みにおいては、*it*の方が*s/he*より自然であり、変貌の読みの場合の主語名詞句とは、意味機能が異なることが示唆される。入れ替わりの読みにおける主語名詞句は変項名詞句であり、変貌の読みにおける主語名詞句は指示的名詞句であるとするならば、この代名詞の選択は、十分、理解できることであると思われる。

## V. 結 語

本稿では、法助動詞を伴うコピュラ文の入れ替わりの読みの意味特性を考察し、値比較の変化文の類例として分析する可能性を探った。この読みをした場合の主語名詞句は、変項名詞句と考えることができるように思われる。*whoever* 節を付加した場合に、主語名詞句を照応する代名詞として、*s/he*よりも*it*が好まれるのは、その非指示性の反映であると言ってよいであろう。これまでに提案されてきた、指示的用法・帰属的用法、事象様相・言表様相、広い作用域・狭い作用域、特定記述・役割タイプ記述という概念に依拠した入れ替わりの読みの説明は、いずれも名詞句の指示性、非指示性の区別に十分な注意を払わず、ただ、「特定の指示対象をもたない」という側面だけを捉えたものである。西川(2008)で指摘された点も含め、主語名詞句を変項名詞句とみなす分析に関する残された問題は、別稿で検討することとしたい。

\*本稿は、2009年8月31日、第5回慶應意味論・語用論研究会(於：慶應義塾大学)において、「『入れ替わりの読み』に関する諸問題」と題して行った口頭発表に加筆・修正を行ったものである。有益な助言を下された西山佑司先生、出席者の方々、例文のチェックをして下さった Richard Simpson 氏に謝意を表す。本研究は、令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「コピュラ文の意味構造と名詞句の定性に関する研究」(課題番号：17K02684)(研究代表者：熊本千明)の助成を受けたものである。

## 註

1. ここでは、metaphysical reading あるいは counterfactual reading と呼ばれる読みを扱う。西山(2003)にならって、「反事実仮想の読み」という語を用いる。
2. 値名詞句は、必ずしも指示的名詞句であるとは限らない。次の例では、値は変項名詞句である。  
(i) この種の実験で一番大切なことは、その部屋の温度だ。値:[xがこの部屋の温度である]  
(西山 1995:134)
3. Donnellan 自身、帰属的用法の例として(i)を挙げている。しかし、どの人がマティーニを飲んでいるのかという解釈においては、(i)は指定文であり、下線部は変項名詞句であると考えられる。  
(i) Who is the man drinking a martini? (Donnellan 1966:287)
4. 現実世界と可能世界における属性の違いを言うのに、「属性変化」/「変貌の読み」という表現を用いるのは、厳密には不適切であるが、変化文との対応関係を示すため、この用語を用いることにする。
5. Higgins が同一性文(identity sentence)としているのでこの意味にとったが、[x is the winner of the election] の値として、ニクソンがマクガバンと入れ代わっていたかもしれないという、西山(1995)の「値変化の第2型」と読むことも可能である。
6. 和泉(2016)が挙げる(27)の例は、反事実仮想の読みも可能ではあるが、思い違い(misbelief)の読みが優先すると思われる。
7. 2006年に冥王星が外れ、太陽系の惑星の数が8と考えられるようになる以前の議論である。
8. 西山(個人談話)は、a. から b. に入れ替わった値、b. について、'b. is proud of himself / his family' とコメントしていると考えれば、主語名詞句 b. は指示的名詞句であるため、先行詞として問題はないが、束縛条件が適用されるレベルに関しての問題が残るかもしれない、という指摘をしている。また、コンピュータ文ではない、(i)のようなタイプの文における入れ替わりの読み(「他の人が新大統領に選出されていたら、日本を訪れたかもしれない」)も考察の対象に含めるとすると、主語名詞句の指示性に関する本稿の議論には、検討の余地が残ることになる。  
(i) The new president might have visited Japan.

## 参考文献

- Akmajian, Adrian et al. (1995) *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*, 4th ed. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Donnellan, Keith S. (1966) "Reference and definite descriptions," *The Philosophical Review* 75: 271-304.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Higgins, Francis Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York: Garland Publishing.
- 和泉悠(2016)『名前と対象』東京:勁草書房.

- 上林洋二(1988)「指定文と措定文—ハとガの一面」『筑波大学文藝言語研究 言語編』14:57-74.
- Kripke, Saul A. (1977(1997)) "Speaker's reference and semantic reference," in Peter Ludlow (ed.) (1997) *Readings in the Philosophy of Language*, 383-414. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Kumamoto, Chiaki (1993) "The referential / attributive distinction and the classification of copular sentences," 福岡言語学会・編『言語学からの眺望』175-189. 福岡:九州大学出版会.
- 熊本千明(1995)「同定文の諸特徴」『佐賀大学教養部研究紀要』27:147-164.
- Kumamoto, Chiaki (1996) "Predicational sentences and specificational sentences," 佐賀大学教養部研究紀要』29:87-114.
- 熊本千明(2003)「非指示的名詞句を主語とする措定文について」福岡言語学会・編『言語学からの眺望 2003』211-225. 福岡:九州大学出版会.
- 熊本千明(2013)「帰属的用法と *Whoever* 節の機能」西山佑司・編著(2013)『名詞句の世界』341-368. 東京:ひつじ書房.
- Mikkelsen, Line (2005) *Copular Clauses*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 西川賢哉(2008) "Attributive / NPIV distinctions", ms.
- Nishiyama, Yuji (1997) "Attributive us and non-referential NPs," in Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru kajita, and Shuji Chiba (eds.) *Studies in English Linguistics, A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His eightieth Birthday*, 752-767. Tokyo: The Taishukan Publishing Company.
- 西山佑司(1995)「コピュラ文の意味と変化文の曖昧性について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』27:133-157.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』東京:ひつじ書房.
- 西山佑司・編著(2013)『名詞句の世界』東京:ひつじ書房.
- Rothschild, Daniel (2007) "Presuppositions and scope," *The Journal of Philosophy* 104(2) :71-106.